

お盆に利他行（六波羅蜜・菩薩行）を思う
 「世界が全体幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（農業芸術概論編要）とは宮沢賢治が残した有名な言葉ですが、これは単なる道徳論ではなく宗教的生命観からの言葉です。即ち、生命は密接に繋がりが合っているのだから全体が幸福にならない限り**全体の一部である個の幸福は有り得ない**のです。世界は相互依存であり、実にお陰さまなのです。

心温まる話をひとつ……

■アパートから少し離れた路地で、老婦人が荷物を手に立ち往生していた。くの字に曲がった腰をさすりながら、縁石に腰かける姿に、私は勇気を出して声をかけた。「荷物をお持ちしまししょうか？」……10年前の夏の暑い日、私は3歳の娘を連れて、無人駅で立ち往生していた。持ってきた水筒のお茶は残り少なく、次の電車で1時間半後にしか来ない。駅舎のベンチに腰かけながら途方に暮れていたところ、ある中年の女性が声をかけてくれた。「どこまで行くの？」「隣のS駅ですけど」と答えて

ると、女性はこんなところで待っていたら、暑くて娘さんも大変だろうから、車で乗せていってあげると提案してくれた。最初は申し訳なくて遠慮したもの、このまま駅舎で待っていては、子どもが熱射病になるかもしれないと思い、ありがたく厚意に甘えさせて頂くことにした。
 ■車の後部座席に乗せてもらい、世間話をしながら、どうしたらこの女性に恩返しができるか必死に考えた。やがて車がS駅に着くと私は「本当にありがとうございました。何かお礼をしたいのですが何をしたらいいでしょうか？」と頭を下げた。すると女性は、「困ったときはお互いさま。私に恩返しをと思うのなら、いつか困っている人を助けてあげて」と言う。何となく受けて取らず笑顔で去っていった。……老婦人の荷物を家まで運ぶ手伝いをしながら、ふとあの夏の日の出来事を思い出した。恩返しのパトンは、まだ私の手の中にある。（産経新聞）
 ■宮沢賢治の母、イチの言葉が浮かびます。
「人というものは、人のために何かしてあげたために生まれて来たのだ」

「日本人の利他的遺伝子」

中村哲医師の死に思う

（以下に村上和雄氏の一文を紹介したい）
 ■昨年12月4日、日本に悲しい知らせが飛び込みました。アフガニスタンで医療や人道支援に尽力していた中村哲医師が、現地で銃撃されて亡くなったのです。享年73歳、志半ばでの悲報です。中村医師は昭和59年からハンセン病根絶のプロジェクトに参加し、その後、診療所を開設して現地の医療に貢献していました。

中村医師は、抗生物質や立派な薬をどれだけ与えても命が救えない状況に、「医療よりもまず水だ」と医療活動を超えた復興支援を決断しました。彼は井戸掘りを始め、平成15年からは「百の診療所より一本の用水路を」と、用水路の建設に挑みました。その甲斐あって、砂漠は緑化され、「干ばつ難民」としてパキスタンに去っていた人々が戻り、再び農業をするようになります。現在、65万人の生活が維持されています。

「平和に武器はいらない」としばしば口にしていた中村医師は、「家族と一緒に暮らし、食べていける。まず、それさえ保障されればアフガニスタンの人々は満足してくれる。紛争も収まっていく」と伝え続けました。しかし、彼らの人道的支援活動に対する脅しが激しくなり、彼は**日本人スタッフを全員帰国させ、たったひとり現地に残りました。**



村上和雄・昭和11年生まれ。筑波大学名誉教授。遺伝子工学での世界第1人者。著書に「スイッチ・オン」の生き方等々。

「平和に武器はいらない」としばしば口にしていた中村医師は、「家族と一緒に暮らし、食べていける。まず、それさえ保障されればアフガニスタンの人々は満足してくれる。紛争も収まっていく」と伝え続けました。しかし、彼らの人道的支援活動に対する脅しが激しくなり、彼は**日本人スタッフを全員帰国させ、たったひとり現地に残りました。**

「命を使うと書いて「使命」といいます。中村医師の活動はすべて医療が原点ですが、医師としての活動を遥かに超え、まるで与えられた使命を果たすかのように行動し続けました。彼の生き方は日本人の誇りであり、私たちの利他的遺伝子をオン

中国で大賛美

■東日本大震災時に宮城県女川町であった心温まる話です。女川町は人口1万人ほどのうち1割の人が亡くなったたり行方不明になったりしました。町内には、100人くらいの中国人研修生がいましたが、彼らは全員無事でした。

ある水産加工会社には20人の中国人研修生がいました。地震の後、宿舎付近の低い場所にいた研修生たちの所へ、専務が走ってきました。

「津波が来るぞー」と叫んで、専務は研修生たちを高台に避難させました。その後、専務は宿舎へ取って返りました。家族の安否が確認されていなかったのです。しかし、宿舎は津波に流れされ、専務

も戻ってきませんでした。専務の兄に当たる社長は、自分の家が流されたにも拘らず、研修生たちが寝泊まりできる場所を一晚中探し歩きました。また、別の会社でも同じようなことがありましたが、まさに、利他的遺伝子の働きです。自分の身や家族の安全さえかえりみず、中国人研修生を救おうとした女川町の方々の行為は、**中国で大賛美されました。**

利他的遺伝子がON

■あの震災では東京近辺でも、たくさんの帰宅困難者が出るなど非常事態となりました。そんな中、東京デイズニールランドとデイズニールの震災への対応は、あちこちで賞賛されています。
自分たちのことよりもお客さん第一という精神が徹底されていて、いざという時に利他的な遺伝子が大いに活躍したのだと思います。

（中略）人間というのはこんな温かかったんだと思えることが、震災後には山ほどありました。人間が持っている利他的遺伝子が、震災という大きな刺激を受けてONになったことで、そういう感動がたくさん生まれたのです。

人は他のために役立つために生まれてきた

日本人として

■人の素晴らしさを引き出した大震災ですが、『明報』という香港の新聞に、ある香港夫婦の被災体験について紹介されています。

この夫婦は、ちょうど震災の日、旅行で石巻に来ていました。送迎バスを待っていたところ、2人は大きな揺れに遭遇したのです。そのため計画を変更して仙台へ行くこと、JRの駅まで戻りました。

しかし、電車はストップし、バス停には長蛇の列ができてしまいました。サイレンが鳴り響き、日本語のできない2人は、どうしていいか途方に暮れていました。そんな彼らにJRの職員が津波が来るから早く高台へ逃げろといふことを、Light High」と必死に伝え、2人

は何とか高台に逃げることでできました。そして、ある一家に泊りお世話になるので、皆で少ない食事を分け合い、励まし合い、忘れられない時間を過ごします。そのうえ一家は、仙台までの車を手配してくれて、さらにたくさんのおにぎりまで持たせてくれたというのです。

「私は恐怖心から泣いたりはしません。彼らに感動して泣いているのです。そんな言葉で、この記事は締めくくられています。
「台湾の『看雜誌』には、次のような記事も紹介されています。
 「大地震の発生後、日本国民は乱れることなく冷静さを保ち、マナーのよさは日本社会のよさを表し、他国で見られがちな混乱や秩序のなさ、強奪といった問題行動

は一切見られなかった。危機のなかにおいて、法に従い、秩序を守る気高さこそが、日本人のすばらしい国民性をより顕著に表している。これは、国際メディアがこぞって絶賛している点である。（中略）
 いったい、どんなパワーが日本人のこういった高度な秩序と自制力を成しえるのだろうか」と。
 また、被災者が片づけ作業中に見つけた他人の金庫を警察署や役所に届けるといったケースが数多くあったそうです。多くの日本人にとつては、それは当然のこととされています。
また、モノ不足による便乗値上げもほとんど行われませんでした。
 ■我が身や家族のことを顧みず中国人を救った女川町の方、おにぎりを香港の夫婦に持たせた石巻の方、そして、こんなにも大変な